

口鉛筆は、プーさんとピン少年の“友情の架け橋”



第1章：プーさんが蜂蜜を求めて
風船で空を飛ぶ話



第2章：ピンの家に行って食べすぎて
出口に挟まる話



第3章でのプーさんカズル探しの話

口A. A. ミルが「プーさん」と「ピン少年（自分の息子）」に込めた願いは



AI で描いたイメージ



- ・ 子どもの頃のプーさんのように想像力や優しさを失わないでほしい
- ・ 成長しても、心の中に優しさと安心できる場所（100エーカーの森）を持っていてほしい
- ・ 森の仲間たちは争わない
- ・ みんな不完全だけど、互いに助け合う

※A. A. ミルは、第一次世界大戦を経験した世界の残酷さを知る。

「プーのえんぴつケース、すこっしょかった？」 「ちょうど、おんなじようっだよ。」

⇒「プーさんと同じ」にうなづくピン少年

※「えんぴつケースはプーさんと同じ」と言われ、うなづくことは、ピン少年にとってプーさんは、一緒に冒険し、悩みを聞き、安心をくれる大切な友達。

口映画男はつらいよ」の“鉛筆を売る”（第47作『男はつらいよ 拝啓 車寅次郎様』1994年）



甥の 満男は大学を出て靴会社の営業職に就くものの、仕事にやりがいを見いだせず愚痴ばかり。柴又に帰ってきた寅さんが、そんな満男に一本の鉛筆を手に取り、「これを俺に売ってみろ」と言うところから始まる。

満男：おじさん、この鉛筆買ってください、ほら、消しゴムつきですよ

寅さん：いりませんよ、ボクは字書かないし、そんなものは全然必要ありません！ 以上！

満男：あ、そうですか

寅さん：そうですよ！

満男：・・・

寅さん：貸してみな（2本の鉛筆をじいっと見つめながら、寅さんはしみじみと語り出す。）

寅さん：おばちゃん、オレはこの鉛筆を見るとな、

おふくろのこと思い出してしょうがねえんだよ不器用だったからねえ、

オレは鉛筆も満足に削れなかった、夜おふくろが削ってくれたんだ、

ちょうどこの辺に火鉢があってなその前にきち〜んとおふくろが座ってさ、

白い手で肥後守をもって、スイスイ、スイスイ削ってくれるんだ

その削りかすが火鉢の中にはいってぷ〜んといういい香りがしてなあ・・・、

きれいに削ってくれたその鉛筆でオレは落書きばかりして、勉強ひとつもしなかった。

でも、このぐらい短くなるとなその分だけ頭が良くなったような気がしたもんだった。

おばちゃん：（財布をとりだし）寅ちゃん、その鉛筆いくらだい。

※“100円家の森”のような“とらや”の家族と現実社会の満男

※鉛筆を「モノ」として売ろうとした満男と、鉛筆の物語から「価値」を伝えた寅さん。

s. kazumitu